「地図豆」の地図を広げて街歩き

126-1　弦巻川（水窪川）跡、雑司ヶ谷霊園墓所めぐり(5.5㎞)

江戸川橋からスタートして弦巻川（水窪川）跡をたどって、東京で一番と言われ中々買うことが出来ないという“音羽・群林堂の豆大福”、そして雑司ヶ谷墓地では有名人のお墓参りをして、庶民の味のランチをする。

雑司ヶ谷宣教師館

【道順】

江戸川橋駅→鷺坂→弦巻川跡→鳩山邸→音羽・群林堂（音羽２−１−2）→→弦巻川跡→水窪川跡→吹上稲荷神社→大塚先儒墓所（豊島ヶ丘御稜）→護国寺→雑司ヶ谷霊園墓所めぐり→雑司ヶ谷宣教師館（雑司が谷 1-25-5）→いり江のランチ（高田 1 丁目 36-21）→都電鬼子母神前→大塚駅

【街歩き解説】

・旧鳩山邸（鳩山会館）

現在の岡山県、勝山藩出身の鳩山和夫がこの地に居を構えたのは明治 24 年である。和夫は、弁護士の地位向上、私学の発展、立憲政治の発達と進歩を理想とした。洋館は大正 13 年に鳩山一郎によって建てられた。首相、初代自由民主党総裁の一郎のほか、妻の薫（共立女子学園理事長）、長男で外相を務めた威一郎を記念する部屋やバラに飾られる庭園などが公開されている。

・吹上稲荷神社

元和 8 年(1622)、2 代将軍徳川秀忠が日光山から稲荷の神体を賜り、江戸城内吹上御殿内に「東稲荷宮」と称したのが始まり。5 代綱吉のころ、江戸城内から一ツ橋に移遷し、その

後、水戸徳川家の分家松平大学頭が拝領し、邸内に移した。

・大塚先儒墓所

徳川幕府に仕えた儒学者たちの「儒葬」による墓地。家族の墓も含め 64 墓ある。
主なものに室鳩巣、木下順庵、柴野栗山、古賀精里らの墓がある。現在は東京都が管理している。見学は、となりの吹上稲荷神社の許可を要す。

・豊島ヶ丘御稜

　明治天皇の第一皇子である稚瑞照彦尊が死産した際、明治政府が皇居に近い武蔵国豊島郡の護国寺所有地に整備された。以後「陵」に埋葬される天皇と皇后を除く皇族専用の墓地として整備されてきた。
　一般人が敷地内に立ち入って墓前参拝をする事は許可されない。

・護国寺

　天和元年（1681）五代将軍徳川綱吉が、生母桂昌院の願いにより創建した祈願寺である。如意輪観音を本尊としている。
　後には将軍家の武運長久を祈る祈願寺となった。元禄時代の本堂、昭和 3 年に移築された月光殿は、ともに国の重要文化財に指定されている。
　明治期以降徳川家との関係が絶たれ、一般人の墓所を造成し、三条実美、山県有朋、田中光顕、大隈重信などが眠る。

・雑司ヶ谷霊園

夏目漱石（１－１４－１側　３番）
泉　鏡花（１－１－１３側３３番）
川口松太郎・浩（１－１６－１０側１３番）
小泉八雲（１－１－８側３５番）
竹久夢二（１－８－９側　３２番）・
島村抱月（１－１６－２側　１２番）
永井荷風（１－１－７側　３番）
島村　抱月（１－１６－２側　１２）
羽仁もと子・五郎（１－１－１０側　４２番）
中浜（ジョン）万次郎（１－１５－１９側　１番）
など多数の文化人が眠る墓所があり、散策に訪れる人も多い。

竹久夢二墓

・雑司ヶ谷宣教師館

明治40年にアメリカ人宣教師のマッケーレブが自らの居宅として建てたもの。マッケーレブは、昭和16年（1941）に帰国するまでの34年間この家で生活をしていた。豊島区内に現存する最古の近代木造洋風建築物。

【入り江】

刺身、焼き魚、てんぷら、どれもが丁寧に作られていて、味噌汁や漬物の味にほっとする。いずれも950円ほど

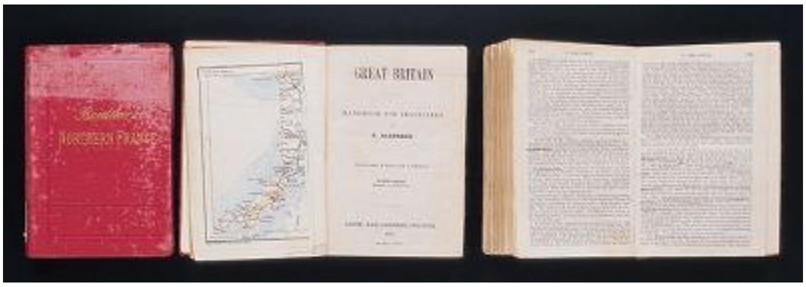
豊島区高田1丁目36-21　03-3981-5463　 定休水曜日

【音羽・群林堂】

餅の塩味と餡の甘味のバランスが絶妙と評判です。文豪が愛した大きな豆大福は、お昼頃には、無くなることが多い。

文京区音羽2－1－2　　03－3941－8281　定休日曜日

夏目漱石とペデカ



旅行案内書「ペデカ（Baedeker's London and its environs)」

（東北大学附属図書館HPより）

正岡子規（1867-1902）と夏目漱石（1867-1916）は、帝国大学の同窓生であったという

ことだけではなく、友として、人間的なことでも、文学面でも互いに大きな影響を与えました。

師でもある子規の「地図好き」の影響を受けたわけではないのでしょうが、夏目漱石もまた、地図を愛する人だったのです。

江戸の牛込馬場下で生まれた漱石は、鴎外のような地方出身者ではなかったから、都内散策に地図を重要視することはなかったかもしれません。しかし、松山中学、熊本五校への赴任、そして英国留学(1900)といった新天地への展開に際しては、地図を使用しなければならなかったでしょう。

といっても、松山や熊本で地図を多用したという話は聞きません。一般的に、都会育ちの者が、地方小都市で生活を送るために地図をそれほど必要としないでしょう（というのは、偏見でしょうか)。

しかし、英国留学となると状況は異なります。

留学体験に取材した「倫敦塔」の中で、「まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中に抛りだされたような」、あるいは「恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用達しのため出であるかなければならなかった。」といっています。

さらに、街角に来るたびに地図を開き、地図で解らないときは人に聞き、人に聞いて解らないときは巡査に聞き、巡査で解らぬときはまたほかの人に尋ねるなどして、目的地にいたるのだとも言わせています。

かなりの、不安を持ってロンドンの街を歩いたのだと思います。

このとき漱石は、ドイツの旅行案内書「ペデカ」を愛用したことが明らかになっています。

鴎外も使用したペデカ(Baedeker)は、1820 年代にドイツ人の印刷業者カール・ペデカが創刊した旅行案内書で、後にフランス語版や英語版も刊行され世界的に有名になったものです。

東北大学の漱石文庫には、彼が愛用した「ペデカ」が残されていて、そこには、多くの書き込みがあり、切り取り失われた地図があり、切り取られた後に貼付された地図もあるといいます。

この断片的な話を聞いただけで、ロンドン散策などの際にガイドブックの中の「地図」が活躍した様子が目に浮かぶようです。そればかりでなく、残された「ペデカ」のロンドン塔の記事部分には、多くの傍線が施されており、「倫敦塔」に生かされているようすが見えるのだといいます。同大学の漱石文庫には、本書のほか、（ノートの断片に記した）自筆イギリス地図も残されています。

さらに、漱石の「硝子戸の中」(1915）には、

「私の家の定紋が井桁に菊なので、それにちなんだ菊に井戸を使って、喜久井町としたという話は、父自身の口から聴いた」

「（一時区長という役を勤めていた・・・）父はまだその上に自宅の前にから南へ行く時に是非共登らねばならない長い坂に、自分の姓の夏目という名をつけた」
とあり、父親もまた勝手に？「喜久井町」や「夏目坂」といった地名をつけるほどの地図・地名に関心の深い人でした。

　ああ、あの漱石とその父もまた「地図好き」だったのだと、言い切ってしまいましょう。

ルートマップ

+＊＊＊+　オフィス　地図豆　店主 yamaoka　mitsuharu